

ストックホルムの床屋

京都工芸繊維大学・応用生物学系 野村 真

新春のお慶びを申し上げます。多様な言語や文化を持つ人々が楽しく暮らせる日がくることを願いつつ、今回は私の海外滞在記の中からの小話をご紹介します。

* *

僕は床屋が大好きだ。床屋に行くと、散髪してくれるだけでなく、シャンプーで洗髪されたり、顔剃りされたり、温かいタオルが顔にのっけられたり、挙句の果てには肩のマッサージがついてきたりする。これは僕にとって、月に一度くらいでやってくる最高のリラクゼーションタイムである。こんな床屋のサービスはどこでも当たり前のことだと思っていたのだけれど、海外で暮らし始めてから、どうもそうではないということに気がついた。

海外生活が長い人と話すと、必ず盛り上がる話題の1つが「髪の毛をどうするか」である。これは旅行や短期滞在では決して味わうことのない、長期滞在ならではの問題だ。生活を考えると、物価の高い国で床屋に行くのはなかなか勇気がいる。だからハサミとバリカンを買って家族の頭髪は自前で切る、という人も多くいたし、実際僕もそうしていた。でも、自分の髪の毛は自分で切れない。だから、やはり現地で床屋に行くしかない。

10年以上前、家族でスウェーデンという国に移り住んだ。数ヶ月が経過して、髪の毛が伸びてきたので、床屋に行かなければと思い始めた。でも、知らない国で知らない店に入るのとても勇気がいる。研究室の同僚に聞いたら、床屋なんてどこでもいいんだよ、と言われる。そういえば、ソルナ・セントランという郊外のショッピングモールの中に理容室らしき店があったのを思い出した。そこで、かみさんと娘がショッピング・モールで買い物をしている間に、僕はそのモールの端っこにある店で散髪することにした。

店に入ると、中東のいでたちをした女性が一人で店番をしていた。後で気づいたのだが、ストックホルムの床屋のほとんどはイラン出身の人であった。理由はよくわからないが、移民が多いスウェーデンでは出身国の職業コミュニティのようなものがあるのかもしれない。女性は、僕を見て明らかに困惑していた。最初、見たこともない小さなアジア人が突然店に入ってきたせいかな、とも思ったが、髪を切ってもらっているうちに、それだけでもないこと気がついた。実はヨーロッパ人の髪とは異なり、アジア人の黒い髪は概して太く、そして硬い。それにも増して、僕の髪は量が非常に多くて、かつタワシのような剛毛なのだ。彼女は多分、僕のような剛毛を切ったことがなくて、散髪にものすごく苦労している様子があった。

できあがった僕の頭を見て、かみさんは絶句し、そして大爆笑した。それはまるで、悪い

組織に拘束されて無理やり坊主にされたようなみじめな有様だった。僕は鏡を見てものすごく悲しくなったが、同時に悟りもした。髪の毛には血管も神経も通っていない。だから、どんな髪型になっても、命に支障はないのだ。

でも、やっぱり生きていくのに、もう少しマシな髪型の方が良い。僕はその後、慎重に店を探し、同じモールの中にその名も「ジェントルマンの床屋」という名前の店を見つけた。ここだったら、僕の髪でも対応してくれるかもしれない。意を決して店に入ると、スタッフらしき数名のおじさんたちがいた。その中から、小柄で恰幅のよい、口髭を蓄えた、まるでスーパーマリオそっくりなおじさんが僕を迎えた。僕は覚えただけのスウェーデン語で「Kan du klippa?(髪の毛切れる?)」と聞いたら、マリオが「ヤー」と答えた。「頭のこのあたりはザクセン(ハサミ)で、ここはマシーン(バリカン)でお願い」と頼んだら、彼は僕の「マシーン」と言う言い方が気に入ったのか、「マシーン!マシーン!」と叫び出した。

実際に散髪が始まると、彼はマシーンしか使わなかった。それはあたかも、木彫りの彫刻をチェーンソーだけで仕上げる芸術家のような感じだった。マシーンばかり使うので、細かい髪の毛が大量に店の床に落ちる。日本だったら箒と塵取りを使うところだが、マリオはそんなものは一切使わず、ドライヤーを最高出力にして床の髪の毛を吹き飛ばすものだから、店内が髪の毛で充満していた。さらに、マリオはそのドライヤーをおもむろに自分の胸元から腋の下に突っ込み、腋汗を乾かし始めた。僕の頭と、店の床と、マリオの腋の下とをドライヤーが行ったり来たりしていた。

そうこうしているうちに、散髪が終了したらしく、出来栄を確認させたいのか僕の後ろから合わせ鏡にしてマリオが何かを言ってきた。僕は近眼なので、眼鏡をかけて鏡を覗き込むと、マリオと目が合った。その瞬間、彼は僕に向かってつぶらな瞳でウィンクをした。不意をつかれた僕が思わず「ハハハ」と笑うと、マリオが大爆笑し、それが他のスタッフや客に伝染して店中がどかんどかんと大爆笑に包まれた。

それから何回かマリオの店に行っただけで、マリオが散髪すると一度として同じ髪型にはならなかった。マシーンしか使わないので、細かい造形が難しかったのだろう。でも僕はすでに悟りの境地に達していたので、どんな髪型でも問題にはならなかった。

3年半ほどスウェーデンにいて、日本に帰ってきてから床屋に行くと、あらためてそのサービスに驚いた。髪の毛もちゃんとハサミで切ってくれるし、洗髪もしてくれて、温かいタオルを顔に乗せてくれたり、拳句の果てには肩マッサージまでしてくれる。床屋の椅子の背もたれを深く倒して目を瞑っている時、ふとソルナ・セントランで最初に入った理容室のことや、マリオのことを思い出して、彼らは今も元気なのだろうか、と思う。髪を切るといって、ただそれだけのことなのに、心から泣きたくなったり、店中爆笑したりした経験は、日常を切り詰めた時に何が最後に残るかとか、当たり前だと思っていたことがそうではなかったりとか、いろんなことを考える良い機会になった。国によって文化が違うし、生活に何を求めるのかが違う、ということなのだと思う。でも僕は、これから海外で暮らす人には必ず「どんなに安いところでも、日本の床屋は最高です」と言うことにしている。



夕暮れ時のソルナ・セントランに向かう妻と娘。